『源語詁』と『源語梯』の比較

――見出し語の照合を中心に

康盛国

一．はじめに

『源語梯』（天明四年刊）は源氏物語の語句をいろは順に並べてそれについての説明を載せた注釈書である。この『源語梯』については最初著者を明らかにせずに刊行されたのを(一)、中井竹山が「五井蘭洲先生ノ著ス所の源語詁」の盗用であると抗議しており、江戸時代の出版騒動の一事例として取り上げられることが多い本である。その騒動の経緯は、竹山の抗議のあと『源語梯』の末尾に追加された竹山自身の「弁」により詳細に述べられており(二)、そのことは、いくつかの先行研究において言及されている(三)。

源語梯ハ．即チ吾蘭洲五井先生ノ著ス所ノ源語詁ナリ．（中略）近コロニ至リ．或人無名氏ノ書ヲ得タリトテ．此源語梯ヲ梓行セルヲ．伝ヘテ閲スレハ．全ク源語詁ニテ．強テ書名ヲ改メ替テ．何人ニ托セシナリ．（中略）天明乙巳之夏　竹山居士識(四)

右は、竹山の「弁」の一部であるが、「源語梯ハ（中略）源語詁ナリ」との断定的な一文はそのまま受け継がれ、現代の『源語梯』についての諸解題において「著者：五井蘭州、原名：源語詁」という説明が為されている。

源語梯　三巻原名源語詁　五井純禎撰　黄備園主人校　天明四年九月刊、大阪、高橋平助発行(五)

源語梯　袖珍本三巻。天明四年九月刊。大阪、高橋平助発行。原名。源語詁。著者は五井純禎（号蘭洲）浪華黄備園主人校(六)

源語梯　三巻三冊。辞書。五純禎（五井蘭洲）著。天明四年（一七八四）刊。純禎の著である『源語詁』を、無名氏の書とし、書名を「源語梯」と変えて出版したため問題になった書で、それについて巻首に門人中井竹山の弁が載せてある。

右記はそれぞれ『国語学書目解題』（一九〇二年）、『詞のしき浪』(七)の翻刻本（一九三八年）所収解題、『日本古典文学大辞典』（一九八三年）に掲載された『源語梯』についての説明であるが、いずれも『源語梯』を「原名、源語詁」などと、「源語梯イコール源語詁」という認識を示している。また、日本古典籍総合目録データベースにおいても、『源語梯』の著者が五井蘭州と明記されていることを見ても(八)、このような認識はまだ崩されていないようである(九)。

ところで、竹山の弁において「カヽレハ．書名モ旧ニ復シ．

梯ヲ詁ト改ムベケレドモ．已ニ本書ト同カラス．」と断られているように『源語梯』と『源語詁』の間には同書とはしがたい距離が存在する。『源語梯』が『源語詁』を基に作られたことは動かない事実であるが、「『源語梯』イコール蘭州作の『源語詁』」という図式が妥当かどうかは、二書の間の距離を検証してから判断する必要があるだろう。このような作業を試みた先行研究としては、井上豊氏、斎木泰孝氏の論考があり、次のような結論を出している。

従って創見を旨としたものではないが、契沖の新説を尊重しているのは注意してよい。かつ従前のものにくらべて語彙の数もずっと多く、体裁も整っていて、当時の源氏物語辞典として画期的といってよい。文化史的研究の資料としても役立つであろう。近代以来あまり顧られずにきたのは単なる偽書として誤解されたためではなかろうか。本書のごときはいわゆる偽書とはいゝがたくたとい偽書とよぶにしても、偽書生成の特異例として注意すべきものである。(十)

井上氏は、『源語梯』が契沖の新説を取り入れたこと、語彙を増やしていること、形式的に体裁を整えていることを挙げ、「当時の源氏物語辞書として画期的」なものと、肯定的な評価をしている。

以上見てきたごとく、『梯』の注の基になった主要な先行注釈としては、『拾遺』『新釈』『故実秘抄』の三書に限ることができる。竹山は、『梯』の作者とその版元を厳しく糾弾しながらも、『梯』に自らの「弁」を附載することで妥協してしまったのは、版元の懇望だけではなく、『梯』がすでに蘭洲の『詁』と相当に異なったものになっていたためと推測する。(十一)

右記のように斎木氏は、『源語梯』が『源語詁』にない注釈を加える際に参照した先行注釈を特定した上で、『源語梯』が『源語詁』とはかなり違うものになっていたことを強調している。ただし、井上氏も斎木氏も、論文を執筆する際に『源語詁』を実際に見て調査を行ったわけではない。両氏は論文においてそのことを明示しており、それは、同じく『源語梯』・『源語詁』を取り上げた中野幸一氏の論考においても実物の『源語詁』は参照されていない。中野幸一氏はその理由について左のように述べている。

鎌倉時代の『仙源抄』以来、『源氏物語』の語句を集めて注解したものは少なくないが、その中に漢学者五井純禎の著になる『源語詁』があることは広く知られている。この『源語詁』は、唯一の伝本であった徳島光慶図書館本が消失したということなので（中野氏注：『源氏物語事典』（東京堂刊）「注釈書解題」）、残念ながらその原態を見ることは出来ないが、改定版といわれる『源語梯』が天明四年九月に刊行されているので、大概の様相は推察できる。(十二)

つまり、『源語詁』の唯一の伝本が消失し、その原態が分からないとのことであり、井上氏・斎木氏の論考においても同じことが述べられている。(十三) しかし、園田学園女子大学図書館（吉永文庫）に『源語詁』（写本）が所蔵されている。この本は、伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史辞典』（東京堂出版、二〇〇一年）にも立項されており、今や周知の事実と見てよいだろうが、実物の『源語詁』を『源語梯』と照合し、二書の違いをより明らかにし、その意義を究明する作業はまだ為されてい

ない。もちろん、『源語梯』の凡例に、その形式的な特徴および編者の主眼などは読むことはできるが、実物の『源語詁』を見ないかぎり、仮名の改編など詳細なことは分からない。

本論文は、実物の『源語詁』と『源語梯』を全体的な形式および見出し語のレベルで照合し、その差異を明らかにするとともに、『源語梯』の編者が施した工夫、ひいては『源語梯』の文学史上の意義を見出すことを目的とする。

そのために先ず、『源語梯』二種（初版本、竹山の弁が追加されたもの）および『源語詁』の書誌的な検討を行い、その上で両書を比較検討するという順で論を進めていく。

二．『源語梯』二種の書誌的検討

筆者が確認した『源語梯』は、大阪大学附属図書館所蔵本（以下、阪大本と略す）と大阪府立中之島図書館所蔵本（以下、中之島本と略す）であり、阪大本は初版本で中之島本は竹山の抗議の後に一部が修正されたものである。両資料は、当時の出版騒動の様子を窺える好資料であるため、二書の書誌情報を左に示す（相違があるところに傍線を付した）。

（1）―①阪大本の書誌情報

所蔵　大阪大学附属図書館（整理番号　五八三）
書形　小本（縦十六・七　×　横十一・八センチ）
匡郭　縦十二・三　×　横八・一センチ（上巻一丁表）
巻数　三巻（上・中・下）一冊
題箋　無し
外題　無し
構成　序三丁、附言四丁（うち凡例一丁）、上巻六〇丁、中巻六十四丁、下巻四十七丁
序　「源語梯序…安永十年かのとのうしむつきついたちの日…」
内題　「源語梯上自以至加」
尾題　「源語梯下終」
附言　「…浪華黄備園主人識」
奥付　「天明四年甲辰九月發行／京都書肆　齋藤庄兵衛／江戸書肆　須原茂兵衛／大阪書肆　大野木市兵衛／同　澁川清右衛門／同　高橋平助」

（1）―②中之島本の書誌情報

所蔵　大阪府立中之島図書館（整理番号　2233 - 104）
書形　小本（縦十六・二　×　横十二・一センチ）
匡郭　縦十二・三　×　横八・一センチ（上巻一丁表）
巻数　三巻（上・中・下）三冊
題箋　単枠
外題　「源語梯自以至加　上」
構成　弁四丁、附言四丁（うち凡例一丁）、上巻六〇丁、中巻六十四丁、下巻四十七丁
序　無し
弁　「源語梯辨…天明乙巳之夏／竹山居士識」
附言　「…浪華黄備園主人識」凡例に「…居士再識」
奥付　「天明四年甲辰九月發行／京師書坊　出雲寺文次郎／同　吉田四郎右衛門／同　風月庄右衛門／同　齋藤庄

兵衛／江戸書坊　須原茂兵衛／大阪書坊　大野木市兵衛／同　澁川清右衛門／同　高橋平助」

右記の書誌的な違いの中で、注目すべきものは、阪大本には、本文の前に「序」「附言」があり、中之島本には、本文の前に「弁」「附言」があるということである。阪大本の「序」と中之島本の「弁」の翻刻は左記のようである（傍線は筆者による。以下、同じ）。

（2）―①　阪大本の「序」

阪大本の序の全文を左に示す。

源語梯序

ひさがたのあめはよくものをふくみ、荒金のつちはよく物をのす、かれふくまるゝものを、よくしれらむものは、あめのおほいなることをしれるなり、またのせらるゝものを、よくしれらむものは、つちのおほいなる事をしれるなり、源語のおほいなる、上は天皇のおほむありさまより、しもはしづのわざにいたるまで、たかきいやしきをとこをみなの、思ひとおもふこと、なしとなすこと、あるは海、あるは山、四の時をり〳〵のさま、物としてふくまざる事なく、のせざることなし、かれそのふくめる物のせたるものを、よくしれらむものは、源語のおほいなることをしれるなり、此物をしらむとほりせば、まづことばをよくわきまへしらるべきなり、いまこの梯とふふみは、源語のときがたく、わきまへがたきことを、たづねもとむるのかけはしなれば、これよりたづねもとめて、つひにそのふくめる物のせたるものをよくしれらば、はじめて此物がたりのおほいなる事をしらるへし、このおほいなることをしれるは、あめつちに、あるとあることを、よくしれるなり、これぞ此ふみをつくれる人の、なすことのちひさからぬわざにこそ

安永十年かのとのうしむつきついたちの日淡海国犬上川のほとりなるなかつかさがしるす

右の序文の末尾に、序文を書いた時期（安永十年正月）と書いた人（淡海国犬上川のほとりなるなかつかさ）が記されている。この箇所については、森銑三氏の論考に言及がある。

然るに關田駒吉氏の示教に拠れば、土佐の宮地仲枝の日記に、「源氏の物語の末書に源語梯と云ふ小冊あり。五井藤九郎作序文に、近江の国犬上川のほとりなる中務が云ふとあり。中務は海量法師が事なりとぞ。海量法師に対話の時尋て聞ぬ」といふ一節があるといふ。（十四）

森銑三氏が、関田駒吉氏から聞いた情報を載せている。関田駒吉氏によると、宮地仲枝の日記（十五）に、源語梯序文における「近江の国犬上川のほとりなる中務」とあるのは海量法師であると海量本人が話した、ということである。森銑三氏該当序文を「五井藤九郎作序文」と称しているのは間違いである。森銑三氏は同論考において、この序文が含まれた『源語梯』を確認していないと述べており、氏の誤認識であるだろう。海量法師（享保十八〈一七三三〉年生、文化十四〈一八一七〉年没）は、近江国犬上郡開出今村の覚勝寺第八代玄明の五男として生まれた僧侶で、明和三（一七六六）年江戸へ出て加藤枝直に師事した人物である。『源語梯』の撰者が不明な中で序文の作成者が海量

である可能性があることは有意義な情報であろう。ただし、序文の末尾に「これぞ此ふみをつくれる人の、なすことのちひさからぬわざにこそ」とあり、『源語梯』の作者をほめている一文からみて、序文を書いた人と撰者とは別人である蓋然性が高い。

（2）—②　中之島本の「源語梯弁」

中之島本所収の「源語梯弁」の全文を左に示す。

源語梯弁

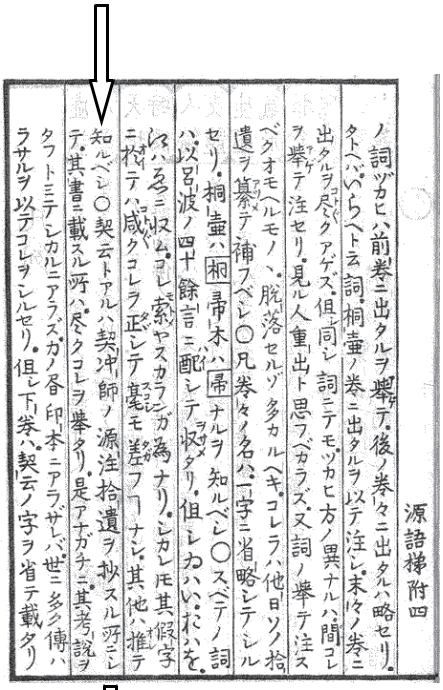
源語梯ハ．即チ吾蘭洲五井先生ノ著ス所ノ源語詁ナリ．先生講学ノ暇ニ．著述スルコト多シ．又ソノ餘力ヲ以テ本邦ノ古籍ニ及ビ．万葉古今勢源ニ語等ヲ．詮釈編次シテ．家ニ蔵ルコト．数部ニ至リ．源語詁モソノ一ツナリ．先生ノ没スル．今ヲ距コト二十餘年．余嘗テ遺命ヲ受テ．其諸編ヲ校訂シ．質疑瑣語非物ノ編ナトハ．已ニ梓シテ世ニ行ヒタレトモ．ソノ餘力ノ撰マテニハイマタ及ハス．近コロニ至リ．或人無名氏ノ書ヲ得タリトテ．此源語梯ヲ梓行セルヲ．伝ヘテ閲スレハ．全ク源語詁ニテ．強テ書名ヲ改メ替テ．何人ニ托セシナリ．サテソノ書ヲ．本書ト比校スルニ．固ヨリ本書ヲ奇貨トスルヨリ出タルコトナレハ．全クハソノ真ヲ失フベクモアラスシテ．先生ノ説ヲ．ソノマヽ用タルモ多ク．又ハ意ニ任セテ節略シタルモアリ．敷演シタルモアリ．又本書ノ説ヲ．或人云トシタルモアリ．或ハ本書ニ有ヲ漏シタルモアリ．或ハソノ無ヲ補ヒタルモ．多ク見ユ．又契沖并ヒニソノ外ノ人ノ説ヲモ．増加セリ．是皆ソノ人．別ニ見トコロアリテ然ルニ非ズ．タヽ本書ノマヽニテ梓スレハ．掠奪ノ恐レアルニヨリ．務メテ面目ヲ．改換シ．ツヰニ書名ヲ変スルニモ至リテ．ソノ痕跡ヲ晦マセルノ狡計也抑先生ノ遺書ヲ．吾党ヨリ．妄リニ人ニ伝ヘタルコトハナキニ．カク他手ニ落タルハイカニト推究スルニ．先生存在ノ日ニ．直ニ請求メテ．伝写シタル一人アリ．ソノ本ヲ．コノ撰者カネテ転借シテ写シ取オキシトナリ．又ソノ刊行ノ書ニハ．序モアリ．又附言トテ撰述刊行ノ大意ヲ述タルモアリ．各ソノ筆者ノ名称アレトモ．コレ又ミナ假托ニ出タル名ニテ．実ニ手ヲ下シタルハ．ソノ一人ニアリト．明カニ聞得タリ．カヽレハ．速ニ官ニ告テ．追毀ヲ行フベキモノナレドモ．ソレモ温籍ヲ欠テ．余ノ欲スル所ニ非ズ．サレハトテ．偽本ノ世ニ行ハルヽヲ手ヲ袖ニシテ旁観センコトハ．遺編ヲ守リ居ル余ニ於テハ．先生ニ地下ニ辞ナキモノアリ．書舗主人．コノ由ヲ伝聞テ．大ニ驚キテ来リ謝シ．コノ上ハ追毀ニ係ルトモ．自カラ甘ンズル所ニテ．餘言ナケレドモ．既ニ官ニ請テ．三都ニ布キ初シコトナレハイカヤウニモ是正ヲ経テ．存スルコトヲ得ハ．大幸ナルヘシト懇請ス．因テ思フニ．編中ノ異同ハ．毛挙スベカラザレハ．今サウ追正ニ及カタケレドモ．先生ノ源語ニ裨益スルノ本意ハ．イマタ失ハス．和文ヲ修ムル人ニ便リスルモノモ．儘ソノ中に在テ．先生ノ餘事ノ功ニ出ル所ナレハ．今ニ於テハ．サシテ異同ヲ問ス．本編ハソノマヽニ存スルヲ許シ．序ト附言トヲ去リ．コノ弁ヲ加ヘテ世ニ告ルコトシカリ．既カヽレハ．書名モ旧ニ復シ．梯ヲ詁ト改ムベケレドモ．已ニ本書ト同カラス．又書舗モ．名ヲ改

ムレハ・別書トナルノ患アリト・サマ〳〵陳乞スルユヘ・止コトヲ得スシテ・ソノマヽニテ行ハシムト云・モシコノ編ヲ読ン人ノ・解説ニ十分ナラヌ所アリ・詳略ニ宜ヲ失ヘルモ見ユルナト・ヲホヘラレンニハ・コレ先生ノ真本ニ非サルコトヲ知ヘキノミ・

天明乙巳之夏　竹山居士識

阪大本（初版本）にあった「序」が中之島本にはなく、竹山の「弁」が中之島本に追加されていることは、「本編ハソノマヽニ存スルヲ許シ・序ト附言トヲ去リ・コノ弁ヲ加ヘテ世ニ告ルコトシカリ・」との竹山自身の言葉にその経緯が述べられている。この「弁」の末尾に「天明乙巳之夏」とあり、初版本が刊行された天明四年の翌年（天明五〈一七八五〉年）にこの「弁」が書かれたことが分かる。ちなみに、竹山は、「序ト附言トヲ去リ」と述べているが、附言に関しては中之島本においても依然として載っており、末尾の二行だけが修正されている。左に該当箇所の翻刻を阪大本・中之島本の順で載せる。

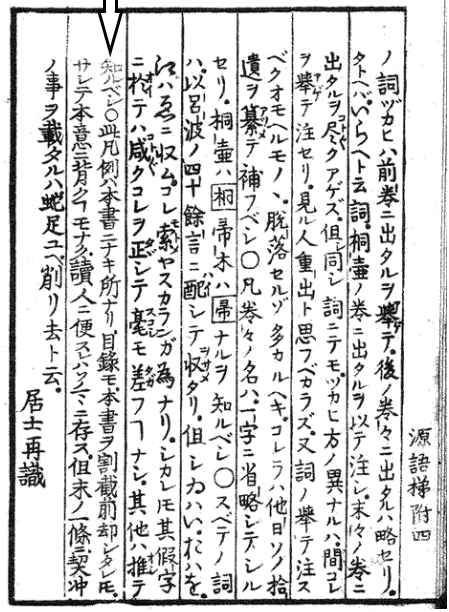
図1　『源語梯』阪大本



源語梯附四

ノ詞ヅカヒハ前巻ニ出タルヲ挙テ・後ノ巻々ニ出タルハ略セリ・タトヘバいらへト云詞・桐壺ノ巻ニ出タルヲ以テ注シ・末々ノ巻ニ出タルヲ尽クアゲズ・但同シ詞ニテモヅカヒ方ノ異ナルハ間コレヲ挙テ注セリ・見ル人重出ト思フガラズ・又詞ノ挙テ注スベクオモヘルモノヽ・脱落セルゾ多カルヘキ・コレラハ他日ソク拾遺ヲ纂テ補フベシ○凡巻々ノ名ハ一字ニ省略シテシルセリ・桐壺ハ桐・帚木ハ帚ナルヲ知ルベシ○スベテノ詞ハ以呂波ノ四十餘言ニ配シテ収タリ・但シカハイ・れハを・ゐハるニ収ムコレ索ヤスカランガ為ナリ・シカレモ其假字ニ於テハ・感クコレヲ正シテ毫モ差フヿナシ・其他ハ推テ知ルベシ○契云トアルハ契沖師ノ源注拾遺ヲ抄スル呼ニシテ・其書ニ載スル呼ハ・尽クコレヲ挙タリ・是アガチニ其考説ヲタフトミテシカルニアラズ・カノ各印本ニアラザレバ・世ニ多ク傳ハラサルヲ以テコレヲシレセリ・但シ下巻ハ・契云ノ字ヲ省テ載タリ

図2　『源語梯』（中之島本）



源語梯附四

ノ詞ヅカヒハ前巻ニ出タルヲ挙テ・後ノ巻々ニ出タルハ略セリ・タトヘバいらへト云詞・桐壺ノ巻ニ出タルヲ以テ注シ・末々ノ巻ニ出タルヲ尽クアゲズ・但同シ詞ニテモヅカヒ方ノ異ナルハ間コレヲ挙テ注セリ・見ル人重出ト思フガラズ・又詞ノ挙テ注スベクオモヘルモノヽ・脱落セルゾ多カルヘキ・コレラハ他日ソク拾遺ヲ纂テ補フベシ○凡巻々ノ名ハ一字ニ省略シテシルセリ・桐壺ハ桐・帚木ハ帚ナルヲ知ルベシ○スベテノ詞ハ以呂波ノ四十餘言ニ配シテ収タリ・但シカハイ・れハを・ゐハるニ収ムコレ索ヤスカランガ為ナリ・シカレモ其假字ニ於テハ・感クコレヲ正シテ毫モ差フヿナシ・其他ハ推テ知ルベシ○此凡例ハ本書ニテキ所ナリ・目録モ本書ヲ割截削却シタレモ・サシテ本意ニ背ク・モナシ・讀人ニ便スベクハ・ニ存ス・但末ノ條ニ契沖ノ事ヲ載タルハ蛇足ニ・ベ削リ去ト云・

居士再識

（3）―①　阪大本の凡例の末尾の2行

「知ルベシ○契云トアルハ契沖師ノ源注拾遺ヲ抄スル所ニシテ．其書ニ載スル所ハ．尽クコレヲ挙タリ．是アナガチニ．其考説ヲタフトミテシカルニアラズ．カノ書印本ニアラザレバ．世ニ多ク伝ハラサルヲ以テコレヲシルセリ．但シ下巻ハ契云ノ字ヲ省テ載タリ」

（3）―②　中之島本の凡例の末尾の2行

「知ルベシ○此凡例ハ本書ニナキ所ナリ．目録モ．本書ヲ割截前却シタレドモ．サシテ本意ニ背クコトモナク．読人ニ便スレハソノマヽニ存ス．但末ノ一條ニ．契沖ノ事を載タルハ．蛇足ユヘ．削リ去ト云．居士再識」

中之島本において、「知ルベシ○」以下のところから入れ木による修正が為されていると考えられる。この凡例が「本書」（蘭州の『源語詁』）に無いものであるが、本書の本意に背くこともなく、読む人にとって便利なものであるから残すということおよび「契云」に関する説明だけ蛇足であるため省略すると述べている。

三．『源語詁』の書誌的検討

園田学園女子大学図書館に所蔵されている『源語詁』（写本）の書誌情報を左に示す。

所蔵　園田学園女子大学図書館。吉永文庫。

（整理番号　913364―G　R）

書形　半紙本（縦二十四・二　×　横十七・二センチ）

巻数　三巻三冊

刊写等　写本

丁付　無し

外題　源語詁

構成『源語詁一』一丁表から二十丁裏までが本文。二十一丁表から二十二丁裏および裏見返しにかけて吉永登氏の書き入れがある（「五井蘭洲　大阪ノ儒者…大日本人名辞書ヨリ収載ス」、「源語梯序…附言…」）

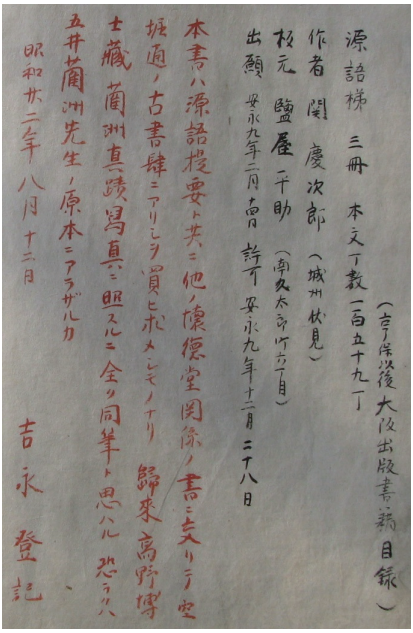
『源語詁二』一丁表から二十四丁表までが本文。二十五丁表から二十五丁裏および裏見返しにかけて吉永登氏の書き入れがある（「源語梯弁～国語学書目解題ヨリ載ス」）

『源語詁三』一丁表から二十九丁裏までが本文。三十丁裏に吉永登氏の書き入れ（『源語梯』書誌、『源語詁』の入手経緯等）がある。

備考　奥書が無く書写年代等不明。『源語詁三』六丁表に付け紙（二十二・五×十・二センチ）あり

右記の書誌情報で示したように、『源語詁』各冊の後半には、旧蔵者である吉永登氏の書き入れがあり、『源語詁　三』の書き入れには同本の入手経緯や本文が誰の字であるかについての見解が述べられている。

図3　『源語詁 三』二十九丁裏


（享保以後大阪出版書籍目録）
源語梯　三冊　本文丁数一百五十九丁
作者　関慶次郎（城州伏見）
板元　塩屋平助（南久太郎町六丁目）
出願　安永九年二月十四日　許可　安永九年十二月二十八日
本書ハ源語提要ト共ニ他ノ懐徳堂関係ノ書ニ交リテ空堀通ノ古書肆ニアリシヲ買ヒ求メシモノナリ　帰来高野博士蔵　蘭洲真蹟写真ニ照スルニ全ク同筆ト思ハル　恐ラクハ五井蘭洲先生ノ原本ニアラザルカ
昭和廿二年八月十二日　吉永登記

（享保以後大阪出版書籍目録）

源語梯　三冊　本文丁数一百五十九丁

作者　関慶次郎（城州伏見）

板元　塩屋平助（南久太郎町六丁目）

出願　安永九年二月十四日　許可　安永九年十二月二十八日

本書ハ源語提要ト共ニ他ノ懐徳堂関係ノ書ニ交リテ空堀通ノ古書肆ニアリシヲ買ヒ求メシモノナリ　帰来高野博士蔵（十六）　蘭洲真蹟写真に照スルニ全ク同筆ト思ハル恐ラクハ五井蘭洲先生ノ原本ニアラザルカ

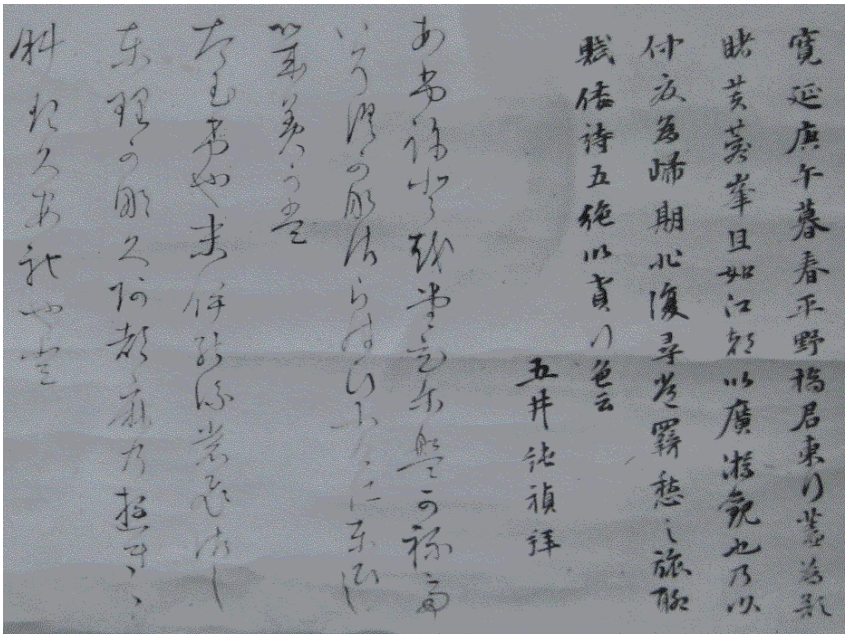
昭和廿二年八月十二日　　吉永登記

右の引用中、一～五行目は墨筆で「享保以後大阪出版書籍目録」に掲載された『源語梯』の項目の全文をそのまま書き写したもの（十七）。『源語梯』の作者を「関慶次郎」としているが未詳である。六～十行目には朱筆で、本書の入手経緯と筆跡についての吉永氏の見解が記されている。「蘭洲真蹟写真」とあるが、『源語詁一』の見返しに、図4のような写真が一枚挟んであった。「五井純禎拝」と書いてあるこの写真がつまり、吉永氏が照合した「蘭洲真蹟写真」のことであろう。吉永氏は図4の写真の筆跡と園田女子大本『源語詁』を同筆としているが、これには反対意見も存する。田中裕氏は、『源語提要』と『源語詁』の考察に主眼をおいた論文で、次のように述べている（十八）。

本文や書入れの状態は著者自筆稿本を思はせるものがあるけれども、筆蹟は蘭州のそれにやゝ遠いので、恐らく門人の忠実なる臨写であらうと推定する。しかしこの写本によって原本の状態は殆んど完全に想定出来るであらう。

田中氏は園田女子大本『源語詁』の筆跡について「蘭州のそれにやゝ遠い」と述べ、蘭州とは別筆とする立場をとっている。図4と『源語詁一』一丁表の画像（図5）を比較してみると字形や筆の運びにおいて違いがあり、筆者もこの二つの資料の字を同一人物のものと断定することは困難であると考える。

図4　『源語詁　一』に挟んであった写真



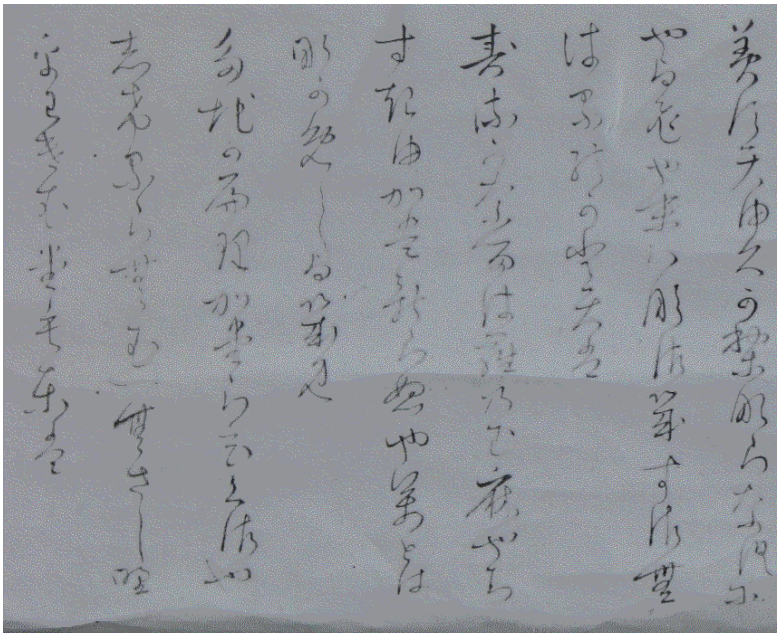
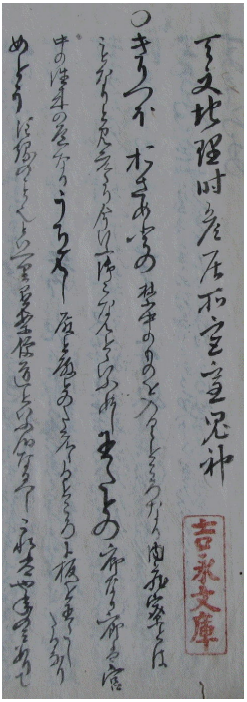


図5　『源語詁 一』一丁表



四．『源語詁』と『源語梯』の比較

（1）構成及び並び順

構成に関して『源語梯』はいろは順が最上位項目になっているのに対し、『源語詁』は分類別項目が最上位にある。具体的に言えば、『源語詁』の場合「分類別→源氏物語の巻順→いろは順」といったように見出し語が並んでいる。『源語梯』は、「いろは別→分類別→『源氏物語』の巻順」になっている。ただし、いろは別項目の中で、「ゐ」部と「い」部、「ゑ」部と「え」部、「を」部と「お」部とはまとめて載せている。実際例を左に示す。

＊『源語詁』の配列

『源語詁一』
「天文地理時座居所宮室鬼神」
・きりつほ
-いろは順＋補
・はゝきゝ
・ゆふかほ
（以下、源氏物語の巻順）
「虚詞」
・きりつほ
-いろは順＋補
『源語詁二』
「人倫支体草木禽獣虫魚」
・きりつほ
-いろは順＋補
「服食器財」
・きりつほ
-いろは順＋補
『源語詁三』
「人事」
・きりつほ

＊『源語梯』の配列

「い」の部
・虚詞人事
-源氏物語の順。以下、同。
・天地時候
・人倫支体
・生植気形
・服食器材
「ろ」の部
・虚詞人事
・天地時候
・人倫支体
・生植気形
・服食器材

※「い」部には「ゐ」から始まる語も合わせて載っている。同じく「え」部に「ゑ～」、「お」部に「を～」が合わせて載っている。

（2）見出し語の数

全見出し語の数は『源語詁』が1938語、『源語梯』が1654語で、『源語梯』の方が284語少ない。分類項目別に分けると左のようである。

・『源語詁』：　全1938語		・『源語梯』：　全1654語	
「天文地理時座居所宮室鬼神」	181	「虚詞人事」	953
「虚詞」	312	「天地時候」	174
「人倫支体草木禽獣虫魚」	335	「人倫支体」	243
「服食器財」	240	「生植気形」	40
「人事」	870	「服食器材」	218
合計	1938	補	26
		合計	1654

（3）見出し語の照合―あ行から始まる語を対象に

『源語詁』と『源語梯』の見出し語を照合することによって、『源語梯』においてなされた改変の様相、ひいてはそれに表れた『源語梯』編者の意識を探りたいと思う。調査の範囲は『源語詁』の見出し語を基準に「あ」行から始まる語にした。（「あ」行から始まる語の数は、『源語詁』が422語、『源語梯』が363語である。）その中で、語幹を同じくする見出し語を照合し、その形の異同・立項数の変化により、以下のように分類した。

①　形と立項数が一致する場合
②　同じ語に対して、形（表記および取っている範囲等）が違う場合
③　見出し語の数が、『源語梯』で減っている場合
④　見出し語の数が、『源語梯』で増えている場合

さらに分類し用例数まで示すと左のようになる。

①形と立項数が一致する場合：174例

※繰り返し記号の有無・濁音の有無の相違は違うものとしなかった。（『源語詁』の場合は、濁音が殆ど付されてないが、『源語梯』にはより徹底的に付されている。174例のうち濁点が付されているのはそれぞれ『源語詁』が15例、『源語梯』が88例である。）

②同じ語に対して、形（表記および取っている範囲等）が違う場合

・漢字使用の相違：39例

※いずれも、『源語詁』の見出し語の漢字混じり語が『源語梯』では平仮名になっている。

・仮名遣いの相違：31例

※31例中、「あえか」「あゑか」の1例を除いて、30例で、『源語梯』の方が歴史的仮名遣いによっている。判断においては『日本国語大辞典』（以下『日国』）の歴史的仮名遣い表記を参照した。

・漢字の相違・仮名遣いの相違が両方見える例：2例

※2例の仮名遣いは、いずれも『源語梯』と『日国』の歴史的仮名遣い表記で一致する。

・見出し語として取っている範囲が、『源語梯』で縮小されている例：6例
・見出し語として取っている範囲が、『源語梯』で拡張されている例：2例
・活用形の相違：6例
・その他の相違：9例

③『源語梯』において見出し語の数が減っている例
・『源語詁』において複数載っている見出し語が『源語梯』においては削られている例：43例　（内、3語→2語になる例が1例あり、残りは複数の語が1語になっている。）
・『源語詁』には載っている見出し語が『源語梯』には1語も載っていない例：57例

④『源語梯』において見出し語の数が増えている例
・『源語詁』において一語以上載っている見出し語が『源語梯』でさらに増えている例：9例
・『源語詁』にない見出し語が『源語梯』において新しく追加されている例：62例

（4）見出し語の照合結果についての分析

（4）—①　仮名遣いの変化について

『源語詁』の見出し語が、『源語梯』において歴史的仮名遣いと一致する方に変わっているのには、『源語梯』編者の意識が反映されていると考えられる。仮名表記が改変されている31例中、24例に関して、『古言梯』(十九)の表記と一致していることが確認できる（資料参照）。『源語梯』編者は確かな基準（歴史的仮名遣い）に依拠し、表記の誤謬を正そうとしていると考えられる。

この意識は、見出し語「いもひ」の意味部でも見て取れる。

例）『詁』いもゐ→『梯』いもひ

『源語梯』「いもひ　イモヰト書ベカラズ」

『源語詁』に「いもゐ」と載っている見出し語が、『源語梯』には「いもひ」と載っている。もちろん「いもひ」の方が歴史的仮名遣いに沿ったものであるが、その下の意味部で「イモヰト書ベカラズ」と断っているのである。『源語詁』の間違いを指摘する口調である。『源語詁』を利用しながらも、そのまま納得するのではなくむしろ積極的に間違いを正そうとする編者の意識がにじんでいるともいえる。

性格はやや違うが、『源語詁』の間違いを指摘するかのような記述は「あなひ」の意味部にも見える。

例）『詁』あない→『梯』あなひ

『源語詁』あない：その家の内をそとよりさくりしるなり

『源語梯』あなひ：常ニ案内ト書テアナイノ仮字ヲ用フシカレトモアナヒハアナヽヒト云ヘル詞ニテアナハ足ナリナヒハ合(アヒ)ナリ猶説アレトモコヽニ略セリ

「常に案内と書いてあないと読むが、あなひはあなひという言葉で…」云々と、『源語詁』の表記を指摘しているかのようである。「あなひ」と表記する根拠としては、語源を「あななひ」(二十)とする説を挙げている。ここにおいても『源語梯』編

者が『源語詁』の表記上の間違いを正そうという意識がにじんでいると考えられる。

このように、『源語詁』の表記の間違いを正そうとする『源語梯』編者の意識は、凡例に断られている。次は『源語梯』凡例の一部である。

○スベテノ詞ハ、伊呂波ノ四十余言ニ配シテ収タリ、但シゐハい、於ハを、江ハゑに収ム、コレ索ヤスカランガ為ナリ、シカレトモ其仮字ニ於テハ咸クコレヲ正シテ毫モ差フ事ナシ、其他ハ推テ知ルベシ

「その仮名においては（間違いを）すべて正してすこしも違うところがない」という言葉には正確な仮名表記にこだわる編者の意識や自信がこもっていると考えられる。

（4）―②　同じ語に対して見出し語の数を減らしていることについて

この場合は、凡例の次の部分によって明らかにされるだろう。

○スベテ物語ノ詞ヅカヒハ前巻ニ出タルヲ挙テ、後ノ巻々ニ出タルハ略セリ、タトヘバ、いらへト云詞、桐壺ノ巻ニ出タルヲ以テ注シ、末々ノ巻ニ出タルヲ尽クアゲズ、但シ同シ詞ニテモ、ツカヒ方ノ異ナルハ、間コレヲ挙テ注セリ、見ル人重出ト思フベカラズ、又詞ノ挙テ注スベクオモヘルモノヽ、脱落セルゾ多カルヘキ、コレラハ他日ソノ拾遺ヲ纂テ補ふべし

つまり『源語梯』の編者は、重複する見出し語がある場合、用例が載っている『源氏物語』の巻を基準に、一番前のものだけを残して、残りを省略したのである。ただ、重複に見えても使い方が違うと判断される場合は、複数載せたと断る。また、重複する見出し語を削った場合でも用例の出典になる巻をまとめて説明している例も確認される。

例）「はうし　（賀）拍子ナリ琴ニテ笛ノ拍子ヲトルナリ
　　又（絵）ニハウシタマハストアルモ拍子ヲトル也」

「はうし」の場合、『源氏物語』の「紅葉賀」巻と「絵合」巻に載っている意味を両方説明している。

（4）―③　『源語詁』にない見出し語が『源語梯』に追加されていることについて

『源語梯』の編者が『源注拾遺』（契沖作、元禄九年成立）を参照・引用していることが先行研究（二十二）において指摘されているが、追加された見出し語についても、その一部が『源注拾遺』から来ていることが筆者の調査により確認された。『源語梯』に追加された見出し語の中で、『源注拾遺』にも載っていることが確認された語は次の通りである。見出し語とともに、各本の意味部までを載せる（『源語梯』において『源注拾遺』の内容を引用した箇所には傍線を付した）。

『源注拾遺』いぬる十よ日：今案、よの字あり音なるへし。下の此十よ年にやなり侍ぬらんを思ふへし

『源語梯』いぬる十よ日：（前略）契沖云、ヨノ字アリ音ナルベシ、下ノ十ヨ年ニやナリ侍リヌラントアルヲオモフベシト云々

『源注拾遺』いへはえにかなしう思へる：今案、えといふは浅きをいへり。下はえならす思ふ心をとよめるも、浅からす下には思ふなり。然れは深く思ふ事もいへは、浅くなりていはれぬをいへはえにといへり。

『源語梯』いへばえに：（前略）契沖云、エオトイフハ浅キヲイヘリ、下ニエナラズ思フ心ヲトヨメルモ、不レ浅下ニ思フ也、然レハ深ク思フ事モ、浅クナリテイハレヌヲ、イヘハエニトイヘリト云々

『源注拾遺』今はのくらき道：今案、法華経等の従冥入於冥の心也。（後略）

『源語梯』いまはのくらきみち：冥途ニオモムクナリ

『源注拾遺』およひゝとつを：羹小指也○今案、此注誤れり。和名云指旨反。和名由比。俗云於與此儀礼云季指和名古於與比小指第五指也。これ指を惣しておよひといへり。

『源語梯』および：オヨビヒトツヲヒキヨセテクヒテ侍シトアリ、契云、小指ナリト注ハ誤レリ、和名ニ、指ハ和名由比、俗ニ云於与比、季指、和名古於与比、小指ハ第五ノ指也、コレ惣シテオヨビトイヘリ云々五ノ指トモニ何のオヨビトイヘルナリ

『源注拾遺』いさとけなり：花さと〳〵しき也。用心する心也。哢物のさとき心也○今案、いは寝なり。ねごきをいきたなしといふ。しは〳〵目のさめていきたなからぬをいのさときといふ也。俗にめさとき人よさとき人なともいへり。花鳥哢花ともにいの字を釈せられぬ事如何。

『源語梯』いさとけ：花鳥ニサト〳〵シキ也。用心スル意也。弄花ニ物ノサトキ心也。契云イハ寝ナリネゴキヲイギタナシト云。シバ〳〵目ノサメテイギタナカラヌヲイノサトキト云俗ニメサトキ人ヨザトキ人ナドモイヘリ。花鳥弄花トモニイノ字ヲ尺セラレヌ事イカヽ

最後の「いさとけ」の場合は、『源注拾遺』の意味部の中の『花鳥余情』・『弄花抄』の引用までそのまま持ってきており、『源注拾遺』により追加した見出し語であることが明らかであるが、他の例においても『源注拾遺』の内容を引用しており『拾遺』により追加されたと見てよい。

五．結論

以上で、『源語詁』と『源語梯』の見出し語を照合し、どのような変更があるか、その改変が何によって起っているかについて分析した。今回の調査をとおして、『源語梯』編者に関して次のことが言えるだろう。

・『源語梯』の編者は、『源語詁』をそのまま踏襲ないしは利用したのではなくて、かなりの手を加えている。改変の内容は次の通りである。

—漢字を平仮名になおした。

—仮名遣いを歴史的仮名遣いに修正した。

—見出し語としている範囲を縮小または拡張した。

—重複する見出し語を削ったり、新しく追加したりした。

・そのような作業の裏面には理想的な注釈書のあり方についての意識が働いていたと考えられる。

『源語梯』の作成において編者がもっていたと想定される意識は、「使用の便宜性」・「仮名表記の正確性」・「注釈書としての充実」であると考える。

まず、『源語梯』で編者は、並び方をいろは順に変えて使う人の便宜を図っている。のみならず、「ゐ」部と「い」部、「ゑ」部と「え」部、「を」部と「お」部とをまとめてのせたことも、仮名遣いの認識の違いにより二度も引かせることのないようにといった、編者の配慮だったと考えられる。重複する見出し語を削ったり、一つの見出し語の下に巻別の意味をまとめることも、使用の便宜性につながる作業だったと考えられる。『源語詁』のつくり（源氏物語の巻順になっていることなど）は、最初に注釈書を作る側に適していると言える。『源語梯』は、『源語詁』の内容をもとに、使う側を徹底的に意識して使用の便宜性を図った点においてその編集の功労を評価していいのではないか。

仮名表記の正確性を図ったことに関しては、おおよそ歴史的仮名遣いに直していることが一番の根拠になるだろう。濁点までより正確に表記されていることにも、表記の正確性への編者のこだわりがにじんでいると言えよう。漢字をわざわざ仮名に直していることは、正確な表記をきちんと示したい気持ちからではないかと考えられる。

最後に、注釈書としての充実性を図ったことに関しては、『源注拾遺』などの見出し語や意味部を足していることが根拠になるだろう。先行研究によって他に参考にした書が明らかになっているので、見出し語に関しても何を引用しているかについて明らかにされる余地があるだろう。

さて、以上のように考察した『源語梯』編者の意識の中で筆者が最も注目したいものは、歴史的仮名遣いへの修正である。江戸時代後期における歴史的仮名遣いの流布については鈴木淳氏の論考に詳しい（二十二）。鈴木氏の論を参照しつつ、歴史的仮名遣い流布の経緯をまとめると左のようである。

・元禄八年（一六九五）『和字正濫鈔』刊行。契沖が万葉学の成果に基づき旧来の定家仮名遣いの誤りを訂したもの。この書により歴史的仮名遣いが創唱されるが契沖生前から批難を浴びた。

・延享元年（一七四四）（京都）契沖の『百人一首改観抄』が刊行されるが、定家仮名遣いに依るもの。結果的に京都における契沖仮名遣いへの反撥を表すものとなった。

・明和二年（一七六五）（江戸）加藤枝直が、謡曲二百拾番に

おける詞章を契沖仮名遣いに訂し、刊行。

・明和六年（一七六九）契沖仮名遣いの補訂を試みた『古言梯』（楫取魚彦著）刊行

・安永四年（一七七五）（京都）小沢蘆庵『千首部類』刊行。契沖仮名遣いに依拠することを跋文に示す。

・安永九年（一七八〇）荷田蒼生子、契沖仮名遣いに従って『古今集』の本文に手を加えて刊行。

・天明八年（一七八八）　京都出身で江戸に下った加茂季鷹、契沖仮名遣いに準じて『正誤仮名遣』刊行。

以上、小沢蘆庵の『千首部類』（安永四年）、荷田蒼生子の『古今集』（安永九年）の例でも分かるように安永年間は、契沖仮名遣いがいよいよ影響力を発揮しようとする時期であった。『源語梯』の成立年は大阪出版書籍目録によると安永九年であり（二十三）、『源語梯』における契沖仮名遣いに拠る表記の改変は、まさにその流れを示すものであると言えよう。このようなことは『源語梯』の内容中に『源注拾遺』の見出し語や注釈を積極的に取り入れたことと合わせて、契沖の学問の顕彰とみていいのではないか。

契沖学問の顕彰という視点からみると、竹山の跋が追加された『源語梯』（中之島本）の奥付に書肆として吉田四郎右衛門が挙がっていることも興味深い。京都の書肆・吉田四郎右衛門については加藤弓枝氏の論考に出版年表がまとめられているなど（二十四）、出版活動の全貌や意義が考察されているが、氏は、小沢蘆庵の門人でもあった六代目の元長（一七七四～一八二四）とその息子が出版に関与したと考えられる六件の契沖関連書を挙げている（二十五）。吉田四郎右衛門により刊行された契沖関連書のうち、『古今六帖題苑』（寛政三年刊）はもと林諸島の編著であるものを契沖作と偽って刊行したものであり、『古今和歌集』（賀茂季鷹跋、文化九年刊）は、契沖真筆でないものを契沖真筆として広告したものであるが、加藤弓枝氏は、このような元長による意図的な改竄を「契沖歌学の顕彰につとめた動きの一環」として捉えている（二十六）。意図的な改竄をしてまで契沖を前面に押し出す点において、『源語梯』は同じ路線にあると言える。京都の書肆・吉田四郎右衛門による契沖顕彰の動きは元長の少年期の時代に、『源語梯』の刊行に関わったことから始まったのである（二十七）。

［注］

（一）「附言」の冒頭に「此書何人ノ作ナルヿヲ詳（ツマビラカ）ニセズ」とある。

（二）例えば、大阪府立中之島図書館所蔵の『源語梯』（整理番号　2233 ― 104）は、中井竹山の弁が追加されたものである。

（三）井上豊「『源語梯』の問題」（『国語学』十二号、一九五三年七月）、同「『源語梯』について - 1 -」（『典籍』八号、一九五三年九月）、同「『源語梯』について - 2 -」（『典籍』九号、一九五三年十一月）、田中裕「源語提要・源語詁について」（『語文』十輯、一九五四年一月）、重松信弘『新攷源氏物語研究史』（風間書房、一九六一年）、斎木泰孝「源語梯と源語詁」（『安田女子大学紀要』十七号、一九八九年）、中野幸一「ある源氏語注書の出版騒動―『源語詁』と『源語梯』と『源語類聚抄』―」（『武蔵野文学』四十五集、一九九七年十二月）

（四）大阪府立中之島図書館所蔵『源語梯』（整理番号　2233 ― 104）

より引用

（五）『国語学書目解題』（赤堀又次郎撰述、一九〇二年）

（六）『詞のしき浪』（足代弘訓著、三ケ尻浩校訂、一九三八年）中、三ヶ尻氏の解題から引用

（七）『詞のしき浪』（足代弘訓編、天保十二年成立）は、『源語梯』『源氏物語玉の小節』『雅語訳解』『詞葉新雅』『消息文例』に載せてある語を集めて五十音順に排列した辞書である。

（八）二〇一五年十二月三日現在

（九）『国書人名辞典』（市古貞次編、岩波書店、一九九三～一九九九年）の「五井蘭州」の項目に、著作として『源語詁』と『源語梯』がともに挙がっている。

（十）井上豊「『源語梯』について‐2‐」（『典籍』九号、一九五三年十一月）

（十一）斎木泰孝「源語梯と源語詁」（『安田女子大学紀要』十七号、一九八九年）

（十二）中野幸一「ある源氏語注書の出版騒動―『源語詁』と『源語梯』と『源語類聚抄』―」（『武蔵野文学』四十五集、一九九七年十二月）

（十三）「『源語詁』は阿波國文庫12寫本で傳っていたのが近年焼失してしまったらしいので詳しいことはわからない、従って『源語梯』を中心に考察することになるが…」井上豊「『源語梯』について（一）」中

（十四）『森銑三著作集　第二巻』（中央公論社、一九七一年）p.109

（十五）宮地仲枝の日記は、『宮地家三代日記』の一部として伝わるもので、原本七十六冊が昭和二十年の空襲により焼失し、現在は中島鹿吉本、松山秀美本、関田駒吉本の三つの写本が伝わる。（中島本を翻刻・紹介した『宮地家三代日記』（宮地佐一郎、光風社書店、一九七〇年）による。）

（十六）高野博士とは、国文学者の高野辰之（一八七六～一九四七）。

（十七）「享保以後大阪出版書籍目録」において『源語梯』に関する記述はこの内容のみである。竹山の弁に「官ニ告テ、追毀ヲ行フベキモノ」ではあるがそうはしなかったと述べられているが、実際に示談で済んだようである。

（十八）田中裕「源語提要・源語詁について」『語文』第十輯（一九五四年一月）。田中裕氏は論文の後半部において、『源語梯』（文政六年上梓）との比較をも行っている。ただし、「本文の改竄の著しいこと」との氏の表現から分かるように、『源語梯』での改変を、恣意的な改竄のレベルで把握しており、『源語梯』についての具体的な考察内容までには言及していない。

（十九）『古言梯』（楫取魚彦、一七六四年成立）：契沖の『和字正濫抄』を補正したもので、後の歴史的仮名遣いの普及に貢献したもの。

（二十）あなない［あななひ］：高い所に上がるための足がかり。足場。あししろ。『日本国語大辞典』による。

（二十一）井上豊氏前掲論文など。

（二十二）鈴木淳「江戸時代後期の歌と文章」『新日本古典文学大系六十八　近世歌文集下』一九九七年

（二十三）初版本（阪大本）の序文には「安永十年かのとのうしむつきついたちの日」とある。

（二十四）加藤弓枝「吉田四郎右衛門出版年表」『上方文藝研究』十二号、二〇一五年六月

（二十五）加藤弓枝「六位の書肆吉田四郎右衛門―出版活動の実態と

古学の伝播に果たした役割―」『近世文藝』百二号、二〇一五年七月。吉田四郎右衛門により刊行された契沖関連書は次のようである。契沖注『古今六帖題苑』（完成三年刊）、契沖著『河社』（小沢蘆庵序　寛政九年刊）、契沖注『勢語臆断』（伴蒿蹊・田山敬儀序、文化九年刊）、契沖板下『古今和歌集』（賀茂季鷹跋、文化九年刊）、契沖著『和歌拾遺六帖』（本居大平序、文政三年刊）、契沖注『源註拾遺』（天保五年刊）

（二十六）「六代元長が少なくとも二点の契沖関連書の意図的な改竄に関わった理由は、鈴木淳氏が指摘するように、契沖歌学の顕彰につとめた動きの一環として位置付けられよう。」（加藤弓枝「六位の書肆吉田四郎右衛門―出版活動の実態と古学の伝播に果たした役割―」前掲）加藤氏の言及する「鈴木氏の指摘」とは、鈴木淳「小沢蘆庵と契沖歌学」（『江戸和学論考』ひつじ書房、一九九七年）の内容であるが、該当論文にはたとえば以下のような文章がある。「ちなみに元長は『古今六帖』の後印本の版元でもあるが、以上のことから蘆庵が書肆と一体になって、契沖歌学と『古今六帖』の普及に努めた姿が、あらためて浮かんでこよう。」

（二十七）ただ、「吉田四郎右衛門」が書肆名として奥付に挙がっている『源語梯』（中之島本）は竹山の跋に「天明乙巳」（天明五年）とあり、この年に元長はわずか十二歳であるから、この書の刊行や販売に彼が関与したとは考えにくい。本論文では、吉田四郎右衛門による契沖顕彰の動きが『源語梯』刊行になんらかのかたちで携わった時点から始まったことを指摘することにとどめ、書肆と『源語梯』の関係などは今後の課題とする。

（かん　そんくっく・大阪大学文学研究科特任助教）

《資料》『源語詁』と『源語梯』の見出し語（ア行）対照表

1．見出し語が一致するもの（濁点の有無・繰り返し記号の使用の有無は区別しないことにする）

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1	3	5オ	はゝきゝ	人事	あかるゝ	虚詞人事	あかるゝ
2	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あいきやう	虚詞人事	あいぎやう
3	3	28オ	やとり木	人事	あいたちなく	虚詞人事	あいだちなく
4	1	14ウ	ゆふかほ	虚詞	あいたれたり	虚詞人事	あいだれたり
5	2	10ウ	かしは木	人倫支体草木禽獣虫魚	あいたれて	人倫支体	あいだれて
6	1	14ウ	ゆふかほ	虚詞	あいなかりけり	虚詞人事	あいなかりけり
7	3	5オ	はゝきゝ	人事	あいなたのみ	虚詞人事	あひなだのみ
8	3	15オ	せきや	人事	あいなのさかしらや	虚詞人事	あいなのさかしらや
9	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あえまし	虚詞人事	あえまし
10	2	22ウ	すゝむし	服食器財	あかつき	服食器財	あかづぎ
11	2	13オ	てならひ	人倫支体草木禽獣虫魚	あかほとけ	人倫支体	あがほとけ
12	2	20ウ	まき柱	服食器財	あかも	服食器財	あかも
13	2	10オ	わかな	人倫支体草木禽獣虫魚	あかれ	虚詞人事	あがれ
14	2	6オ	よもきふ	人倫支体草木禽獣虫魚	あけまき	人倫支体	あげまき
15	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	あこ	人倫支体	あこ
16	2	18ウ	ゑあわせ	服食器財	あこめ	服食器財	あこめ
17	3	9ウ	ゆふかほ	人事	あさはか	虚詞人事	あさはか
18	3	26ウ	みのり	人事	あさへたる	虚詞人事	あざへたる
19	3	5オ	はゝきゝ	人事	あされ	虚詞人事	あざれ
20	3	8オ	ゆふかほ	人事	あされありく	虚詞人事	あざれありく
21	1	7ウ	わかな	天文地理時座居所宮室鬼神	あしこに	天地時候	あしこに
22	2	20ウ	うめか枝	服食器財	あしてうたゑ	服食器財	あしでうたゑ
23	1	12オ	きりつほ	虚詞	あせすは	虚詞人事	あせずは
24	2	4オ	ゆふかほ	人倫支体草木禽獣虫魚	あせもしとゝ	人倫支体	あせもしとゝ
25	2	6オ	みをつくし	人倫支体草木禽獣虫魚	あそひ	虚詞人事	あそび
26	3	2オ	きりつほ	人事	あそひ	人倫支体	あそび
27	3	2オ	きりつほ	人事	あそひくさ	虚詞人事	あそびぐさ
28	2	4オ	わか紫	人倫支体草木禽獣虫魚	あそひかたき	人倫支体	あそびがたき
29	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	あそん	人倫支体	あそん
30	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	あた人	人倫支体	あだ人゛
31	3	26ウ	ゆふきり	人事	あたへかくして	虚詞人事	あだへかくして
32	3	17オ	うす雲	人事	あたけすきたる	虚詞人事	あだげすきたる
33	3	18ウ	玉かつら	人事	あたまれて	虚詞人事	あたまれて
34	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あためく	虚詞人事	あだめく
35	2	8ウ	ほたる	人倫支体草木禽獣虫魚	あつかはしき	人倫支体	あつかはしき
36	3	10オ	末つむ花	人事	あつかふ	虚詞人事	あつかふ
37	2	15ウ	若紫	服食器財	あつま	服食器財	あづま

38	2	8オ	玉かつら	人倫支体草木禽獣虫魚	あてき	人倫支体	あてき
39	3	17ウ	をとめ	人事	あて/＼のこまけ	虚詞人事	あてあてのこまげ
40	3	28ウ	あつま屋	人事	あてびても	虚詞人事	あてびても
41	3	15ウ	夂あはせ	人事	あとをくらうなし	虚詞人事	あとをくらうなし
42	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あな	虚詞人事	あな
43	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あなかち	虚詞人事	あながち
44	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あなかま	虚詞人事	あなかま
45	3	10オ	末つむ花	人事	あは/＼しき	虚詞人事	あはあはしき
46	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あはつかし	虚詞人事	あはつかに
47	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あはひ	虚詞人事	あはひ
48	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あばれたらん	虚詞人事	あばれたらん
49	3	13ウ	すま	人事	あひなう	虚詞人事	あひなく
50	2	15オ	ゆふかほ	服食器財	あふきのいとうこかしたる	服食器戝	あふぎのいとうこがしたる
51	2	19ウ	こてふ	服食器財	あくら	服食器戝	あぐら
52	2	24オ	うき舟	服食器財	あふり	服食器戝	あふり
53	1	20ウ	あつまや	虚詞	あぶれん	虚詞人事	あぶれん
54	3	26オ	よこ笛	人事	あへなかるへし	虚詞人事	あへなかるべし
55	3	10オ	末つむ花	人事	あまえて	虚詞人事	あまえて
56	2	19オ	うす雲	服食器財	あまかつ	服食器戝	あまがつ
57	1	3オ	ゆふかほ	天文地理時座居所宮室鬼神	あめのあし	天地時候	あめのあし
58	2	21ウ	わかな	服食器財	あやめ	服食器戝	あやめ
59	3	10オ	末つむ花	人事	あらましこと	虚詞人事	あらましごと
60	1	5ウ	まつ風	天文地理時座居所宮室鬼神	あれまとふ	天地時候	あれまどふ
61	2	18ウ	せき屋	服食器財	あを	服食器戝	あを
62	3	28ウ	てならひ	人事	いかきさま	補	いかきさま
63	1	8オ	かしは木	天文地理時座居所宮室鬼神	いかのほと	天地時候	いかのほど
64	1	10オ	きりつほ	虚詞	いかめしう	虚詞人事	いかめしう
65	1	15ウ	あふひ	虚詞	いかめしう	補	いかめしう
66	3	18オ	玉かつら	人事	いきたらじ	虚詞人事	いきたらじ
67	3	23ウ	若菜	人事	いきまき	虚詞人事	いきまき
68	3	27オ	紅梅	人事	いきめくらふ	虚詞人事	いきめぐらふ
69	3	9ウ	末つむ花	人事	いさとき	虚詞人事	いざとき
70	2	14オ	きりつほ	服食器財	いし	服食器材	いし
71	3	22ウ	まき柱	人事	いそきまとはし	虚詞人事	いそぎまどはし
72	3	21ウ	みゆき	人事	いそしく	虚詞人事	いそしく
73	3	2ウ	はゝきゝ	人事	いたにねられす	虚詞人事	いだにねられず
74	3	11ウ	あふひ	人事	いたはりのそみ	虚詞人事	いたはりのぞみ
75	1	5オ	よもきふ	天文地理時座居所宮室鬼神	いたふき	天地時候	いたぶき
76	3	13オ	さかき	人事	いちはやく	虚詞人事	いちはやく
77	2	8オ	玉かつら	人倫支体草木禽獣虫魚	いちめ	人倫支体	いちめ
78	2	9ウ	まき柱	人倫支体草木禽獣虫魚	いつきむすめ	人倫支体	いつきむすめ
79	3	11ウ	あふひ	人事	いつくしき	虚詞人事	いつくしき

80	3	12オ	あふひ	人事	いてあらすや	虚詞人事	いであらずや
81	3	23ウ	若菜	人事	いてきえして	虚詞人事	いできえして
82	3	2ウ	はゝきゝ	人事	いでばえ	虚詞人事	いでばえ
83	1	20オ	はしひめ	虚詞	いてや	虚詞人事	いでや
84	1	8オ	かしは木	天文地理時座居所宮室鬼神	いてゐ	天地時候	いでゐ
85	3	8ウ	ゆふかほ	人事	いとなし	虚詞人事	いとなし
86	3	23ウ	若菜	人事	いとまいるわさ	虚詞人事	いとまいるわざ
87	3	9ウ	末つむ花	人事	いなびぬ	虚詞人事	いなびぬ
88	3	16オ	うす雲	人事	いびき	虚詞人事	いびき
89	2	4ウ	もみち賀	人倫支体草木禽獣虫魚	いへのこ	人倫支体	いへのこ
90	1	12オ	はゝきゝ	虚詞	いまめかしく	虚詞人事	いまめかしく
91	3	9ウ	末つむ花	人事	いまめきたる	虚詞人事	いまめきたる
92	1	10オ	きりつほ	虚詞	いみしき	虚詞人事	いみしき
93	3	22オ	まき柱	人事	いや/＼しき	虚詞人事	いやいやしき
94	2	22オ	かしはき	服食器財	いよす	服食器材	いよす
95	1	2オ	はゝきゝ	天文地理時座居所宮室鬼神	いよのゆけた	天地時候	いよのゆげた
96	2	8ウ	とこ夏	人倫支体草木禽獣虫魚	いしふし	服食器材	いしぶし
97	1	10オ	きりつほ	虚詞	いらへ	虚詞人事	いらへ
98	3	10ウ	紅葉賀	人事	いりあや	虚詞人事	いりあや
99	2	1オ	きりつほ	人倫支体草木禽獣虫魚	いわけなき	虚詞人事	いわけなき
100	1	6オ	玉かつら	天文地理時座居所宮室鬼神	うき	天地時候	うき
101	3	10ウ	紅葉賀	人事	うけはしけに	虚詞人事	うけはしげに
102	3	22オ	藤はかま	人事	うけはり	虚詞人事	うけばり
103	3	15オ	よもきふ	人事	うけひ	虚詞人事	うけび
104	3	4ウ	はゝきゝ	人事	うしろみたりし	虚詞人事	うしろみたりし
105	1	13オ	はゝきゝ	虚詞	うしろやすく	虚詞人事	うしろやすく
106	3	16ウ	うす雲	人事	うすゝき	虚詞人事	うすゝき
107	1	18オ	みゆき	虚詞	うたゝ	虚詞人事	うたゝ
108	1	17オ	玉かつら	虚詞	うちあはで	虚詞人事	うちあはで
109	1	18オ	まきはしら	虚詞	うちはへ	虚詞人事	うちはへ
110	3	27オ	紅梅	人事	うちすかい	虚詞人事	うちすがひ
111	1	1オ	きりつほ	天文地理時座居所宮室鬼神	うちはし	天地時候	うちはし
112	2	22オ	よこ笛	服食器財	うちまき	服食器戝	うちまき
113	2	21オ	わかな	服食器財	うちめ	服食器戝	うちめ
114	3	4ウ	はゝきゝ	人事	うちよみ	虚詞人事	うちよみ
115	2	24オ	うき舟	服食器財	うづち	服食器戝	うづち
116	3	12オ	あふひ	人事	うひだち	虚詞人事	うひたち
117	3	11ウ	あふひ	人事	うぶやしなひ	虚詞人事	うふやしなひ
118	3	4オ	はゝきゝ	人事	うめきたるけしき	虚詞人事	うめきたるけしき
119	2	17オ	あふひ	服食器財	えいまき	服食器戝	えいまき
120	2	5オ	あふひ	人倫支体草木禽獣虫魚	えせずれう	人倫支体	えせずれう
121	2	15ウ	末つむ花	服食器財	えひのか	服食器戝	えびのか
122	3	5オ	はゝきゝ	人事	えん	虚詞人事	えん

123	2	23オ	あけまき	服食器財	おいつきかき	服食器戝	おひつきがき
124	2	8オ	玉かつら	人倫支体草木禽獣虫魚	おうな	人倫支体	おうな
125	2	14オ	きりつほ	服食器財	おくしあけのてうと	服食器戝	おぐしあげのてうど
126	3	26オ	ゆふきり	人事	おしこめて	虚詞人事	おしこめて
127	3	12オ	あふひ	人事	おしこりて	虚詞人事	おしこりて
128	3	3オ	はゝきゝ	人事	おそましき	虚詞人事	おぞましく
129	1	1ウ	きりつほ	天文地理時座居所宮室鬼神	おだき	天地時候	おたぎ
130	3	27ウ	はしひめ	人事	おちあふれて	虚詞人事	おちあふれて
131	2	23ウ	あつまや	服食器財	おとしかけ	服食器戝	おとしがけ
132	3	10ウ	紅葉賀	人事	おとしくさ	虚詞人事	おどしぐさ
133	3	26オ	ゆふきり	人事	おとなしう	虚詞人事	おとなしう
134	3	3オ	はゝきゝ	人事	おとなひん	虚詞人事	おとなびん
135	3	24オ	若菜	人事	おとなぶめれと	虚詞人事	おとなふめれと
136	2	2オ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	おのかしゝ	虚詞人事	おのがじゝ
137	3	8ウ	ゆふかほ	人事	おひさき	補	おひさき
138	3	17ウ	をとめ	人事	おひすかひ	虚詞人事	おひすがひ
139	3	12ウ	さかき	人事	おひのひかみ	虚詞人事	おいのひがみ
140	3	16オ	うす雲	人事	おびれたる	虚詞人事	おびれたる
141	3	22オ	まき柱	人事	おふなき	虚詞人事	おふなき
142	2	9ウ	ふちはかま	人倫支体草木禽獣虫魚	おほいきみ	人倫支体	おほいぎみ
143	1	4ウ	すま	天文地理時座居所宮室鬼神	おほいとの	天地時候	おほいとの
144	3	8ウ	ゆふかほ	人事	おほえたるところあり	虚詞人事	おほえたるところあり
145	1	4ウ	すま	天文地理時座居所宮室鬼神	おほえとの	天地時候	おほえどの
146	1	10ウ	きりつほ	虚詞	おほかた	虚詞人事	おほかた
147	1	17ウ	とこ夏	虚詞	おほ/＼しき	虚詞人事	おぼおぼしき
148	3	1オ	きりつほ	人事	おほししつむ	虚詞人事	おぼししづむ
149	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おほそうなる	虚詞人事	おほぞうなる
150	3	1オ	きりつほ	人事	おほつかなく	虚詞人事	おほつかなく
151	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おほとき	虚詞人事	おほどき
152	3	1オ	きりつほ	人事	おほとのこもり	虚詞人事	おほとのごもり
153	2	15ウ	末つむ花	服食器財	おほひちりきさくはち	服食器戝	おほひちりきさくはち
154	2	20オ	とこなつ	服食器財	おほみおほつほ	服食器戝	おほみおほつぼ
155	1	18ウ	わかな　上	虚詞	おほろけ	虚詞人事	おぼろげ
156	2	21オ	わかな	服食器財	おほんつき	服食器戝	おほんつき
157	2	12ウ	やとり木	人倫支体草木禽獣虫魚	おもかくし	人倫支体	おもかくし
158	3	24オ	若菜	人事	おもきらひ	虚詞人事	おもぎらひ
159	3	10ウ	紅葉賀	人事	おもたちて	虚詞人事	おもだちて
160	3	3オ	はゝきゝ	人事	おもてふせ	虚詞人事	おもてぶせ
161	2	2オ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	おもと	人倫支体	おもと
162	3	10ウ	紅葉賀	人事	おもなのさまや	虚詞人事	おもなのさまや
163	2	9オ	みゆき	人倫支体草木禽獣虫魚	おもなれて	人倫支体	おもなれて
164	2	14オ	きりつほ	服食器財	おもの	服食器戝	おもの
165	2	11オ	よこ笛	人倫支体草木禽獣虫魚	おもひおよひかほ	人倫支体	おもひおよびがほ

166	3	24オ	若菜	人事	おもひくまなき	虚詞人事	おもひくまなき
167	3	1オ	きりつほ	人事	おもひとち	虚詞人事	おもひどち
168	3	22オ	まき柱	人事	おもひとちめん	虚詞人事	おもひとぢめん
169	3	1オ	きりつほ	人事	おもひねんせめ	虚詞人事	おもひねんぜめ
170	3	22オ	藤はかま	人事	おもひくまなし	虚詞人事	おもひくまなし
171	3	21オ	みゆき	人事	おもひふくれ	虚詞人事	おもひふくれ
172	3	14オ	みをつくし	人事	おやかり	虚詞人事	おやがり
173	3	25ウ	かしは木	人事	おやのけう	虚詞人事	おやのけう
174	3	6ウ	ゆふかほ	人事	おりたちて	虚詞人事	おりたちて

2.『源語梯』において変更されている見出し語

1）漢字使用の有無

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1	2	11オ	ゆふきり	人倫支体草木禽獣虫魚	あか君	人倫支体	あがきみ
2	1	15ウ	あふひ	虚詞	あかぬ所なし	虚詞人事	あかぬところなし
3	1	7ウ	わかな	天文地理時座居所宮室鬼神	あさ涼みのほと	天地時候	あさすゞみのほと
4	1	8オ	ゆふきり	天文地理時座居所宮室鬼神	あさ露のおもはん	天地時候	あさつゆのおもはん
5	2	23オ	しゐかもと	服食器財	あしろ屏風	服食器戝	あしろびやうぶ
6	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	あて人	人倫支体	あてぴと
7	2	20オ	ふちはかま	服食器財	あらはし衣	服食器戝	あらはしごろも
8	3	6ウ	ゆふかほ	人事	いきをのへ給ひて	虚詞人事	いきのへたまひて
9	1	5オ	よもきふ	天文地理時座居所宮室鬼神	いける浄土	天地時候	いけるじやうど
10	1	5ウ	まつ風	天文地理時座居所宮室鬼神	いさら井	天地時候	いさらゐ
11	2	5ウ	すま	人倫支体草木禽獣虫魚	いたつら人	人倫支体	いたつらびと
12	1	9オ	てならひ	天文地理時座居所宮室鬼神	いちの所	人倫支体	いちのところ
13	2	16オ	末つむ花	服食器財	いまやう色	服食器材	いまやういろ
14	2	12オ	はしひめ	人倫支体草木禽獣虫魚	いらゝきたる顔	生植気形	いらゝぎたるかほ
15	1	6ウ	野わき	天文地理時座居所宮室鬼神	いりもみする風	天地時候	いりもみするかぜ
16	1	8オ	ゆふきり	天文地理時座居所宮室鬼神	岩木よりけに	天地時候	いはきよりけに
17	2	9ウ	ふちのうら葉	人倫支体草木禽獣虫魚	うかひの長	人倫支体	うかひのをさ
18	2	18ウ	まつ風	服食器財	うき木	服食器戝	うきゝ
19	2	16ウ	あふひ	服食器財	うすゝみ衣	服食器戝	うすゞみごろも
20	2	11オ	よこ笛	人倫支体草木禽獣虫魚	うちき姿	人倫支体	うちぎすがた
21	2	20オ	かゝり火	服食器財	うち杰	服食器戝	うちまつ
22	2	10オ	わかな	人倫支体草木禽獣虫魚	うつし心	虚詞人事	うつしごゝろ
23	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	うとき人	人倫支体	うときひと
24	2	4ウ	もみち賀	人倫支体草木禽獣虫魚	うねへ女蔵人	人倫支体	うねめをんなくらうど
25	2	1オ	きりつほ	人倫支体草木禽獣虫魚	うへ人	人倫支体	うへぴと
26	2	8オ	玉かつら	人倫支体草木禽獣虫魚	御かた	人倫支体	おんかた
27	2	14ウ	はゝきゝ	服食器財	御くたもの	服食器戝	おんくだもの

28	3	17ウ	をとめ	人事	おくたかき者	虚詞人事	おくたかきもの
29	1	3オ	若むらさき	天文地理時座居所宮室鬼神	おくまりたる山	天地時候	おくまりたるやま
30	2	14オ	きりつほ	服食器財	御ぞ	服食器戝	おんそ
31	1	16ウ	をとめ	虚詞	御そ		
32	2	10オ	わかな	人倫支体草木禽獣虫魚	御たらう	人倫支体	おんたらう
33	3	11ウ	花の宴	人事	おほとけたる声	虚詞人事	おほどけたるこゑ
34	3	28ウ	あつま屋	人事	おほとれたる声	虚詞人事	おほどれたるこゑ
35	2	11オ	かしは木	人倫支体草木禽獣虫魚	おほやけ人	人倫支体	おほやけびと
36	2	5オ	あふひ	人倫支体草木禽獣虫魚	おほよそ人	人倫支体	おほよそびと
37	3	28オ	やとり木	人事	おもひやる方なく	虚詞人事	おもひやるかたなく
38	2	12ウ	うきふね	人倫支体草木禽獣虫魚	おやのかふ子	人倫支体	おやのかふこ
39	2	14ウ	はゝきゝ	服食器財	御よそほひ	服食器戝	おんよそほひ

２）仮名遣いの相違

	『源語詁』					『源語梯』		『古言梯』（明和二年刊） ※勉誠社文庫58（1979年）参照		
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語	丁	見出し語	意味
1	3	26ウ	みのり	人事	あえか	虚詞人事	あゑか	2ウ	あゑか	【平安】
2	2	14オ	きりつほ	服食器財	あさかれゐ	服食器戝	あさがれひ	18オ	かれひ（かれいひ）	朝飯なり【餉】
3	1	16ウ	みをつくし	虚詞	あつひたまへる	虚詞人事	あついたまへる	—	—	—
4	3	7ウ	ゆふかほ	人事	あない	虚詞人事	あなひ	3オ	あなゝひ	造作の具なり【麻柱】
5	3	17オ	うす雲	人事	あない					
6	1	4オ	すま	天文地理時座居所宮室鬼神	あまのいわや	天地時候	あまのいはや	4ウ	いは	【磐】
7	3	27ウ	たけ河	人事	あわの御ことはりや	虚詞人事	あはの御ことわりや	1オ	あは	あは／＼しきなり【淡】
								25オ	ことわり	理又義
8	2	1ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	いえとうし	人倫支体	いへとうじ	5オ	いへ	【家】
9						補	いへどうじ			
10	2	12ウ	あつまや	人倫支体草木禽獣虫魚	いかとうめ	虚詞人事	いがたうめ	33オ	たうめ	今老女を呼ぶ【専】
11	3	23ウ	若菜	人事	いもゐ	虚詞人事	いもひ	57ウ	もひ	瓦器なり【盌】
12	3	12ウ	さかき	人事	いんふたき	虚詞人事	ゐんふたぎ	—	—	—
13	3	27オ	紅梅	人事	うちすかい	虚詞人事	うちすがひ	—	—	—
14	3	18ウ	玉かつら	人事	うゐ／＼しき	虚詞人事	うひうひしき	11ウ	うひ	【初】
15	3	17ウ	をとめ	人事	えひしれて	虚詞人事	ゑひしれて	13ウ	ゑひ（ゑふ・ゑへる）	【酔】
16	3	21ウ	みゆき	人事	えりふかう	虚詞人事	ゑりふかう	13ウ	ゑる	刻なり。【雕】又【彫】
17	3	5オ	はゝきゝ	人事	えんすれは	虚詞人事	ゑんずれは	—	—	—
18	2	23オ	あけまき	服食器財	おいつきかき	服食器戝	おひつきがき	69ウ	おひ（おふ）	【追】
19	3	11ウ	あふひ	人事	おゝしく	虚詞人事	をゝしく	14ウ	を	【雄】～訓なり
20	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おさ／＼	虚詞人事	をさをさ	16オ	をさ／＼	長々なり。【専】
21	1	17オ	をとめ	虚詞	おさ／＼					
22	1	1オ	きりつほ	天文地理時座居所宮室鬼神	おさめとの	天地時候	をさめどの	15ウ	をさむ	【治】又【修】
23	1	4オ	すま	天文地理時座居所宮室鬼神	おさめ殿					

24	2	5ウ	すま	人倫支体草木禽獣虫魚	おさめみかはやうと	人倫支体	をさめみかはやうど	15ウ	をさむ	【治】又【修】
25	3	20ウ	野わき	人事	おちかうして	虚詞人事	おぢこうじて	69ウ	おぢ（おづ）	【忙怕】
26	2	13オ	ゆめのうき橋	人倫支体草木禽獣虫魚	おとこ	人倫支体	をとこ	15オ	をとこ（をのこ）	【男】
27	3	9ウ	末つむ花	人事	おとこたうか	虚詞人事	をとこだふか	—	—	—
28	3	12ウ	さかき	人事	おひのひかみ	虚詞人事	おいのひがみ	69オ	おい（おゆ・およ）	【老】
29	2	9ウ	まき柱	人倫支体草木禽獣虫魚	おもてをかんかたなく	人倫支体	おもておかんかたなく	69ウ	おき（おく）	【置】
30	3	12ウ	さかき	人事	おもてをこし	虚詞人事	おもておこし	69ウ	おき（おく）	【起】
31	3	17ウ	をとめ	人事	おれたること	虚詞人事	をれたること	15オ	をり（をる）	【折】

３）漢字の相違・仮名遣いの相違が両方見える

1	3	15ウ	袞風	人事	いさり出	虚詞人事	ゐざりいで	68オ	ゐざり	居去るなり。【膝行】
2	1	2オ	はゝきゝ	天文地理時座居所宮室鬼神	いなか家たつ柴かき	天地時候	ゐなかいへだつしばがき	68オ	ゐなか	【田舎】

４）取っている範囲の縮小

1	3	23ウ	ふちのうら葉	人事	あさましかりし世	虚詞人事	あさまし
	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あさましきまて		
2	3	18オ	玉かつら	人事	いきさしけはい	虚詞人事	いきざし
3	3	6ウ	ゆふかほ	人事	いむことのしるし	補	いむこと
4	3	15ウ	袞風	人事	いろひつかうまつる	虚詞人事	いろひ
5	1	5ウ	うす雲	天文地理時座居所宮室鬼神	うらゝかなる空	天地時候	うらゝか
6	1	13オ	はゝきゝ	虚詞	うるさくなん	虚詞人事	うるさく

５）取っている範囲の拡張

1	2	11ウ	ゆふきり	人倫支体草木禽獣虫魚	おによりけにも	人倫支体	おんこゝろこそおによりけにも
2	3	3オ	はゝきゝ	人事	おもかくし	虚詞人事	おもがくしにや

６）活用形の相違

1	3	8オ	ゆふかほ	人事	あえかに	虚詞人事	あえかなる
2	3	19オ	はつね	人事	あはつけき	虚詞人事	あはつけし
3	3	13ウ	すま	人事	あひなう	虚詞人事	あひなく
4	3	12ウ	さかき	人事	いたづき	虚詞人事	いたづく
5	1	14ウ	わか紫	虚詞	いといたし	虚詞人事	いといたう
6	3	9ウ	末つむ花	人事	いとましき	虚詞人事	いどましさに

７）その他の相違

1	3	26オ	ゆふきり	人事	あしのけののほりたる心ちす	虚詞人事	あしのけのぼりたるこゝちす
2	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あはつかし	虚詞人事	あはつかに
3	3	19ウ	ほたる	人事	いけみころしみ	虚詞人事	いけみころし
4	1	14オ	はゝきゝ	虚詞	いとよかなり		
5	3	2ウ	はゝきゝ	人事	いひしろひ	虚詞人事	いひしらひ
6	3	2ウ	はゝきゝ	人事	いひそしてる	虚詞人事	いひそし
7	2	23オ	しゐかもと	服食器財	いろなりとかいふめるひすいたちて	服食器材	いろなりとかいふひすいだちて
						補	いろなり
8	3	1ウ	きりつほ	人事	うこんのつかさのとのゐまうし	虚詞人事	うこんのつかさとのゐまうし

３．『源語梯』において見出し語の数が縮小されたもの

１）複数の用例→一つ

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1	3	28オ	やとり木	人事	あいたちなく	虚詞人事	あいだちなく
	3	19ウ	ほたる	人事	あいたちなき		
2	1	11オ	きりつほ	虚詞	あいなく	虚詞人事	あいなく
	3	14オ	みをつくし	人事	あいなく		
3	1	16オ	すま	虚詞	あからさま	虚詞人事	あからさま
	1	19オ	わかな　下	虚詞	あからさま		
4	3	12オ	あふひ	人事	あくかるゝ		
	3	5オ	はゝきゝ	人事	あくかれ	虚詞人事	あくがれ
	3	22ウ	まき柱	人事	あくかれ		
5	3	23ウ	ふちのうら葉	人事	あさましかりし世	虚詞人事	あさまし
	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あさましきまて		
6	3	13ウ	すま	人事	あさり	虚詞人事	あさり
	3	26オ	ゆふきり	人事	あさり		
7	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あたらし	虚詞人事	あたらし
	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あたらし		
	1	17オ	玉かつら	虚詞	あたらしく		
	3	19オ	玉かつら	人事	あたらしく		
8	1	11オ	きりつほ	虚詞	あちきなう	虚詞人事	あぢきなう
	3	16ウ	うす雲	人事	あちきなし		
9	1	11オ	きりつほ	虚詞	あつしく	虚詞人事	あつしく
	3	26ウ	みのり	人事	あつしく		
10	2	2ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	あてはか	虚詞人事	あてはか
	3	6オ	はゝきゝ	人事	あてはか		

11	3	7ウ	ゆふかほ	人事	あない	虚詞人事	あなひ
	3	17オ	うす雲	人事	あない		
12	1	14ウ	わか紫	虚詞	あなかしこ	虚詞人事	あなかしこ
	3	28オ	やとり木	人事	あなかしこ		
13	1	13ウ	はゝきゝ	虚詞	あなかま	虚詞人事	あなかま
	3	24ウ	若菜	人事	あなかまたまへ		
14	3	5オ	はゝきゝ	人事	あはめ	虚詞人事	あばめ
	3	5オ	はゝきゝ	人事	あはめ給ひそ		
15	3	17ウ	をとめ	人事	あふさす	虚詞人事	あふさず
	3	21ウ	みゆき	人事	あふさす		
16	1	11ウ	きりつほ	虚詞	あへなく	虚詞人事	あへなく
	3	5オ	はゝきゝ	人事	あへなく		
17	1	17ウ	はつね	虚詞	あへなん	虚詞人事	あへなん
	1	19オ	かしはき	虚詞	あへなん		
	3	25ウ	かしは木	人事	あへなん		
	3	28ウ	てならひ	人事	あへなん		
18	3	10オ	末つむ花	人事	あまえて	虚詞人事	あまえて
	3	24ウ	若菜	人事	あまへて		
19	3	5オ	はゝきゝ	人事	あやにく	虚詞人事	あやにく
	3	22ウ	まき柱	人事	あやにく		
20	2	8ウ	とこ夏	人倫支体草木禽獣虫魚	いうそく	虚詞人事	いうそく
	3	19オ	はつね	人事	いうそく		
21	1	15オ	わか紫	虚詞	いさかし	虚詞人事	いざかし
	3	9ウ	ゆふかほ	人事	いさかし		
22	1	12オ	はゝきゝ	虚詞	いて	虚詞人事	いで
	1	15ウ	あふひ	虚詞	いて		
23	1	12オ	きりつほ	虚詞	うしろみ	虚詞人事	うしろみ
	3	4オ	はゝきゝ	人事	うしろみ		
24	1	12オ	きりつほ	虚詞	うしろめたう	虚詞人事	うしろめたう
	3	2ウ	きりつほ	人事	うしろめたう		
25	1	12オ	きりつほ	虚詞	うたて	虚詞人事	うたて
	3	2ウ	きりつほ	人事	うたて		
	3	20オ	とこ夏	人事	うたて		
26	1	13オ	はゝきゝ	虚詞	うちつけ	虚詞人事	うちつけ
	3	24オ	若菜	人事	うちつけこと		
27	2	22ウ	ゆふきり	服食器財	うつし	服食器賤	うつし
	2	22ウ	にほふ宮	服食器財	うつし		
28	1	18オ	ふちはかま	虚詞	うつたへ	虚詞人事	うつたへ
	3	22オ	藤はかま	人事	うつたへ		
29	3	20オ	とこ夏	人事	うめき		
	3	24ウ	若菜	人事	うめき給ふ		
	3	4オ	はゝきゝ	人事	うめきたるけしき	虚詞人事	うめきたるけしき

30	1	16オ	あふひ	虚詞	うんし	虚詞人事	うんじ
	3	12オ	あふひ	人事	うんし		
31	1	16ウ	よもきふ	虚詞	えうし	虚詞人事	えうし
	3	15オ	よもきふ	人事	えうして		
32	1	14ウ	ゆふかほ	虚詞	おいらか	補	おいらか
	3	3オ	はゝきゝ	人事	おいらか		
33	1	12オ	きりつほ	虚詞	おかし		
	3	13オ	すま	人事	おかし		
	1	11オ	きりつほ	虚詞	おかしき	虚詞人事	おかしき
	3	26オ	よこ笛	人事	おかしき顔して		
34	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おさ/＼	虚詞人事	をさをさ
	1	17オ	をとめ	虚詞	おさ/＼		
35	1	1オ	きりつほ	天文地理時座居所宮室鬼神	おさめとの	天地時候	をさめどの
	1	4オ	すま	天文地理時座居所宮室鬼神	おさめ殿		
36	1	11オ	きりつほ	虚詞	おしなへたらぬ	虚詞人事	おしなべたらぬ
	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おしなへたる		
37	2	14オ	きりつほ	服食器財	御ぞ	服食器戝	おんそ
	1	16ウ	をとめ	虚詞	御そ		
38	1	15オ	紅葉賀	虚詞	おふな/＼		
	1	20オ	たけ河	虚詞	おふな/＼	虚詞人事	おふなおふな
39	1	16ウ	せきや	虚詞	おほそう		
	3	16オ	うす雲	人事	おほそう		
	3	18オ	玉かつら	人事	おほそう		
	1	12ウ	はゝきゝ	虚詞	おほそうなる	虚詞人事	おほぞうなる
40	1	2オ	はゝきゝ	天文地理時座居所宮室鬼神	おほとなふら	天地時候	おほとなぶら
	2	14ウ	はゝきゝ	服食器財	おほとなふら		
41	3	6ウ	ゆふかほ	人事	おもたゝしう	虚詞人事	おもたゞしう
	1	10ウ	きりつほ	虚詞	おもたゝしき	虚詞人事	おもたゞしき
	3	16オ	うす雲	人事	おもたゝしく		
	3	18オ	玉かつら	人事	おもたゝしく		
42	2	1オ	きりつほ	人倫支体草木禽獣虫魚	およすけ	虚詞人事	およずけ
	3	1オ	きりつほ	人事	およすけ		
43	3	19オ	はつね	人事	おれ/＼しき	虚詞人事	おれおれしき
	3	21オ	みゆき	人事	おれ/＼しき		

２）削除

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1	3	5オ	はゝきゝ	人事	あきたきこと		
2	3	20オ	とこ夏	人事	あげもの		

3	2	11オ	ゆふきり	人倫支体草木禽獣虫魚	あしときおくる		
4	3	17ウ	をとめ	人事	あたけ		
5	1	16オ	あふひ	虚詞	あたり/＼		
6	1	16オ	さか木	虚詞	あたり/＼		
7	2	21ウ	わかな	服食器財	あつみえたる紙		
8	1	16オ	すま	虚詞	あなかたわや		
9	1	17ウ	はつね	虚詞	あのことく		
10	3	5オ	はゝきゝ	人事	あへかなる		
11	3	5オ	はゝきゝ	人事	あへかにも		
12	1	17ウ	とこ夏	虚詞	あへものとなん		
13	3	24ウ	若菜	人事	あまかけり		
14	2	7オ	うす雲	人倫支体草木禽獣虫魚	あまそき		
15	1	18オ	まきはしら	虚詞	あまりこと		
16	2	5オ	あふひ	人倫支体草木禽獣虫魚	あらをそらにて		
17	2	6ウ	灸あはせ	人倫支体草木禽獣虫魚	いせおのあま		
18	1	16オ	すま	虚詞	いたきところ		
19	3	13オ	すま	人事	いちはやき世		
20	3	18オ	玉かつら	人事	いつかしき		
21	3	26ウ	ゆふきり	人事	いといはけて		
22	1	14オ	ゆふかほ	虚詞	いとけうとき		
23	2	16ウ	あふひ	服食器財	いのこの餅		
24	3	19オ	こてふ	人事	いふこさかしらなる御親心		
25	2	2オ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	いもうと		
26	3	14ウ	みをつくし	人事	いろふし		
27	2	5ウ	すま	人倫支体草木禽獣虫魚	うしろて		
28	3	2オ	きりつほ	人事	内にてたり		
29	3	10ウ	紅葉賀	人事	うつしけかとよ		
30	3	13ウ	すま	人事	うつしけかとよ		
31	2	4オ	わか紫	人倫支体草木禽獣虫魚	うときまらうと		
32	3	4オ	はゝきゝ	人事	うなつく		
33	2	11ウ	まほろし	人倫支体草木禽獣虫魚	うなひと		
34	1	1オ	きりつほ	天文地理時座居所宮室鬼神	うへつほね		
35	3	6ウ	ゆふかほ	人事	おいちかに		
36	2	20ウ	うめか枝	服食器財	御いましめの両の方		
37	1	20オ	やとりき	虚詞	おいや		
38	2	14オ	きりつほ	服食器財	大床子		
39	1	3オ	ゆふかほ	天文地理時座居所宮室鬼神	おきなかつ		
40	3	10ウ	紅葉賀	人事	おこなるへし		
41	3	6ウ	ゆふかほ	人事	おしくらみて		
42	2	12ウ	あつまや	人倫支体草木禽獣虫魚	おそき人		

43	2	1オ	きりつほ	人倫支体草木禽獣虫魚	おとな		
44	2	3ウ	ゆふかほ	人倫支体草木禽獣虫魚	おとな		
45	3	14ウ	よもきふ	人事	おとろかい給はぬ		
46	2	7オ	あさかほ	人倫支体草木禽獣虫魚	おはおとゝ		
47	1	14オ	はゝきゝ	虚詞	おひらかに		
48	3	16オ	うす雲	人事	おほけなし		
49	1	18オ	みゆき	虚詞	おほしおきてけれ		
50	1	11オ	きりつほ	虚詞	おほな/＼		
51	3	6ウ	ゆふかほ	人事	おほめかしなから おほけなく		
52	3	11ウ	あふひ	人事	おもたしけある		
53	3	18オ	玉かつら	人事	おもなの人や		
54	2	8ウ	こてふ	人倫支体草木禽獣虫魚	御らう		
55	2	14オ	きりつほ	服食器財	おりひつものこも の		
56	3	19ウ	こてふ	人事	おれ花		
57	3	22オ	藤はかま	人事	おんにおつる		

4.『源語梯』において見出し語の数が増加されたもの

1）用例が増える

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1	2	1ウ	はゝき木	人倫支体草木禽獣虫魚	いえとうし	人倫支体	いへとうじ
						補	いへどうじ
2	3	28ウ	てならひ	人事	いかきさま	補	いかきさま
						虚詞人事	いかきさまなり
3	3	21ウ	みゆき	人事	いそしく	虚詞人事	いそしく
						補	いそしく
4	1	10オ	きりつほ	虚詞	いらへ	虚詞人事	いらへ
						補	いらへ
5	2	23オ	しゐかもと	服食器財	いろなりとかいふ めるひすいたちて	服食器材	いろなりとかいふひす いだちて
						補	いろなり
6	3	6オ	はゝきゝ	人事	おたしく	虚詞人事	おだしく
						虚詞人事	おだしう
7	3	13オ	すま	人事	おひしらへる	虚詞人事	おいしらへる
						人倫支体	おいしらへる
8	1	16オ	花ちる里	虚詞	おほめく	虚詞人事	おほめく
						虚詞人事	おぼめく
9	3	24オ	若菜	人事	おもし	虚詞人事	おもし
						虚詞人事	おもしおきてけれ

２）新しい用例を追加する

	『源語詁』					『源語梯』	
	『詁』巻	丁	『源氏』巻	分類項目	見出し語	分類項目	見出し語
1						虚詞人事	あざやか
2						天地時候	あしわかのうら
3						虚詞人事	あたら
4						虚詞人事	あふなく
5						虚詞人事	あらましう
6						虚詞人事	ありへてのち
7						虚詞人事	あるじ
8						虚詞人事	いかけ
9						虚詞人事	いぎたなき
10						虚詞人事	いきのした
11						虚詞人事	いきぶれ
12						虚詞人事	いくそたび
13						虚詞人事	いざさめ
14						虚詞人事	いざたまへ
15						補	いさとけ
16						補	いざや
17						補	いたちのはべらんやうなる
18						虚詞人事	いたづらぶし
19						虚詞人事	いつつのなにがし
20						服食器材	いつへのあふぎ
21						虚詞人事	いといたしかし
22						天地時候	いぬる十よ
23						生植気形	いばえ
24						虚詞人事	いひしらず
25						補	いひはやし
26						虚詞人事	いぶせき
27						虚詞人事	いへばえに
28						天地時候	いますがり
29						虚詞人事	いまはた
30						天地時候	いまはのくらきみち
31						虚詞人事	いままゐり
32						虚詞人事	いわけて
33						服食器戝	うちき
34						天地時候	うたがた
35						虚詞人事	うつしざま
36						生植気形	うなゐまつ
37						虚詞人事	うはへ

38						生植気形	うみまつ
39						虚詞人事	うらぶれ
40						虚詞人事	うれたき
41						服食器戝	えんにすきたるぢんばこ
42						服食器戝	おをじ
43						天地時候	おきなががは
44						人倫支体	おきなび
45						虚詞人事	おこなひのらう
46						人倫支体	おこなひびと
47						虚詞人事	おしくゞみて
48						人倫支体	おしことどもり
49						虚詞人事	おしたち
50						虚詞人事	おずましかんへきわさをも
51						人倫支体	おぜなか
52						服食器戝	おつこえたるかみ
53						虚詞人事	おとしあふさず
54						虚詞人事	おどろおとろしう
55						虚詞人事	おのがみゝにつけたる
56						虚詞人事	おふけなく
57						人倫支体	おほきみすかた
58						虚詞人事	おほとか
59						人倫支体	おもやう
60						虚詞人事	おもりか
61						人倫支体	および
62						虚詞人事	おれもの